

京都大学 総合人間学部 広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

| | | |
|------------------------------------|------------|----|
| 絶対的差異の起源と広がり | 新宮 一成..... | 2 |
| いま気になっていること - 退任の挨拶に代えて - | 高橋 由典..... | 4 |
| ニタリア国ものがたり | 篠原 資明..... | 6 |
| 厄介な代物 | 石田 明文..... | 8 |
| 運動医科学からの提言 | 森谷 敏夫..... | 10 |
| 数学ことはじめ | 宇敷 重廣..... | 12 |
| 順風満帆 | 森本 芳則..... | 14 |
| 羽田記念館で学んだこと | 松浦 茂..... | 16 |
| 吉田山雑感 | 川島 昭夫..... | 18 |
| 「いつか来た道」を振り返って - 三つの大きな出来事 - | 丸橋 良雄..... | 20 |

外から見た「総人・人環」

| | | |
|---------------------------|------------|----|
| 人環は文理融合をいかに実現させるべきか | 高橋 義人..... | 22 |
| 身を置いて19年 離れて6年 | 堀 智孝..... | 24 |

特集 ご退任を迎えられる先生方から

絶対的差異の起源と広がり

新宮 一成 (人間科学系)



小学生のころ、学年と学年の間はどうなっているのだろうということが気になって、悩める子どもになったことがあります。3年生の3月の31日の24時00分と、4年生の4月1日の0時00分が同じだとしたら、その日時に自分はいったい3年生なのか4年生なのか、といったようなことです。同じ時刻に二つの本質があるのは変で、どちらかが間違いに違いありません。親にも訊いてちょっと困らせましたが、親は子どもが何を訊いているのかよく分からなかったか、話を面倒だと思ったかのどちらかでした。皆さんにも同じような経験がないでしょうか？

この原稿を書いているのは12月で、もうすぐあの恐ろしい12月31日の24時00分がやってきます。そうです、気が付いたら1月1日になっているというのは、とても気持ちが悪いものです。いったいそこで何が起こったのでしょうか？毎年とても不思議な気がしていました。ちなみに今は平成27年の12月です。

その不愉快さを耐え忍びつつ馬齢を重ねていたある時、高浜虚子の「去年今年貫く棒の如きもの」という句を知るに至りました。きっと虚子も、あの不思議さを知っていた人に違いない、と思っていたら、最近、南伸坊の句「去年今年貫く棒がここにある」に出会いました。これは『ねこはい』

という「ねこが俳句を作ったら」という趣向でできた絵本です。しかもフランスの人に教えられました。

そこには壁から棒が突き出ている絵が描いてあり、それに向かって猫がぎょろっと横眼をむけているのです。つまり虚子のいう棒は、猫から見れば、ちゃんとそこにある、人間サマには見えないだけ、というわけです。

そうか、と思いました。もともとの虚子の俳句の「去年と今年を貫いている棒のようなもの」というのは、幻覚体験だったのです。見えるはずのないものが見えている、あるいは五感のどこかで感じられている、これこそ、人もいう幻覚に他なりません。虚子の幻覚が俳句で言葉になって、人は皆それを鑑賞する。なんと素晴らしいことであろうか。そういえば、洞窟の岩壁にむかってぎょろっと目をむいているあの達磨大師、彼もまた、人には見えないものを見ている。猫のように、壁しか見えないところに宇宙の真理が見えている。

幻覚だと考えれば、腑に落ちることがたくさんあります。まず、これを気にしていた幼いころの私は、ちょっと病気だったかもしれないということです。それは無いものなので、何とかしてそれを掴まえようと思えば、病気になるしかないのです。

虚子の「棒」には、いろんな解釈があり、たとえば年が変わっても、自分自身はどっしりと変わらない、本来の自我を実現した男の悟りだとか、

自然の不易とか、不壊の命そのものとか。。。うむ、なるほど、宇宙の真理に近いです。しかし、そもそも幻覚なのですから、それを見たり感じたりすることは煩悩のなせる業です。それは無であると知らなくてはなりません。本来の自我とか、不易の自然とか、不壊の命とか、宇宙の真理とか、皆、まとめて「無」です。「^{ぼうむ}棒無」という「無」。

とくにこの初めのもの、自我、イマドキの言葉なら、アイデンティティ、これは「無」の中でも最もコシヤクなものということになりそうです。年が変わっても、自分が自分でいられること、これがいかにも不思議で、そして、不思議だということによって、私は私で在り続けていることを、自分でも知らないままに確信していたのですから、私は小さなデカルトであったのです。そして、「諸法無我」の境地を知らない煩悩の人でもあったのです。

不思議という気持ちは、無でしかなかったのです。ではその無を、どうして私は感じてしまったのでしょうか。それは、その無が、絶対的差異という無であったからです。言葉は、差異だと言われます。去年も今年も、言葉の働きによって作られます。それですのに、言葉は自然と仲良くしているような顔をして、言葉がある以上はそこに何かがあるように思わせてくれます。言葉に囚われることになった子どもが、言葉に囚われて助けを求めつつ、やがて言葉に籠絡されてゆく図、それが悩める私でした。

フランスの精神分析の人ラカンは、「シニフィアンは、絶対的差異であることによってしか、機能しない」と喝破しました。シニフィアンというのは、ここでは言葉の根本のことです。人の中には、あるはずのない差異を導入して、人をどこか別のところに疎外する、それが言葉の根本的な作用です。シニフィアンという言葉自体はフランス語ですが、私と同じようにフランスに留学していたあ

る先生から、「シニフィアンと書いてある本は読まない！」と宣言されました。彼はラカンを拒否していたのですね。無であるところの言葉というものに、つまり差異であるところの言葉に、彼は憤りを感じていたのだと思います。私が不思議を感じたと同様に、彼は憤りを感じ、それぞれがそれぞれの我を獲得して、その我を通したのです。

つまりそれぞれが研究したのです。私はラカンを研究してきました。ラカンを研究する以上、むろんフロイトもです。彼はまた別の人を。そして私は、まもなくやって来る12月31日を乗り切ると、来年の3月31日を迎えます。そしてその近傍で、京都大学の研究者ではなくなります。

その後も私が私であるかどうかは、ほとけ様にお任せするつもりです。

(しんぐう かずしげ)

特集 ご退任を迎えられる先生方から

いま気になっていることー退任の挨拶に代えてー

高橋 由典 (人間科学系)



長きにわたった在職期間を振り返り、それについて個人的な感懐を述べることに、これがこの種の稿で求められていることであるように思う。読み手の側からいえば、普段はなかなか聞けない、退職教員の個人的な感懐に

ふれられることが、こうした文章の魅力であることはまちがいない。私も一読者としてこれまでそのようなつもりで読んできた。ただ私はこの稿執筆の時点で研究科長＝学部長の職にあり、個人的な感懐に身を委ねるだけの余裕がまったくない。1年半近くになる在任期間中、新しい企画をいくつも提案したりしたので、その行く末なども気になって仕方がない。任期ぎりぎりまでこの状態が続くのではないかと思う。無理に退職教員らしいことを言おうとしても、うわの空の言葉しか出てこない予感がする。

というようなわけなので、大変勝手ながら、部局の責任者としていま気になっていることを述べることで退任の挨拶とさせていただきたいと思う。上にも書いたように、この1年半ほどの間に部局全体に関係するいくつかの提案をしてきた。それらは内容的には、人環・総人の教育に関するものだ。「いま気になっていること」とは部局の教育に関することにほかならない。そうした提案は京都大学における私個人のヒストリーと深く結びついている。私は15.6年ほど前から京都大学の教養教育の問題に関与してきた。部局への諸提案がこうした経歴を背景にしてなされていることはまちがいない。部局の「いま」を語ることは、私自身の過去を振り返ることでもある。そのように考えれば、このテーマ設定もまったく場ちがいでないような気がする。

私は2014年10月に研究科長に就任した。同年4月の評議員・副研究科長就任も思いもかけぬ出来事だったが、これはそれに輪をかけた大事件だった。力量不足はあまりにも明らかだったが、尻込みをしている暇はなかった。責任は果たさねばならない、などと柄にもなく殊勝なことを考えていた。

その当時どのような問題意識を抱いていたのか語ることから始めたい。

主に二つのことを考えていた。一つは他研究科・学部との差異の問題だ。人環を構成している専門分野の多くは、京都大学の他研究科にも存在している。(たとえば)社会学や日本史は文学研究科にあり、物理学や地球科学は理学研究科にもある。人環の研究・教育は、他研究科においてなされているそれらとどこが異なるのか。むろん指導する教員は異なるので、そこに研究科ごとのちがいは出てくるかもしれない。しかしそれは相対的に小さな差異である。遠くから見ると人環と他研究科は(個々のディシプリン単位では)同じことをしている。同じ事情は学部にもある。総人の学生は、卒業するときには各専門分野での作法に沿った卒論・卒研の作成をする。社会学を専攻する総人生と同じく社会学を専攻する文学部生との間に本質的なちがいはない。

こうした事態は部局にとって由々しき問題である。他研究科・学部にすでにある専門分野を物理的に束ねているだけなら、独立の部局である必要は必ずしもない。人環・総人が独立の部局であることを主張しようと思うなら、「物理的に束ねている」以上の意義がこの部局にあることを自らの手で明らかにしなくてはならない。

いうまでもなくこれはかなりの難題である。この課題に対する答えとして「学際」をもちだすという手もないわけではない。人環や総人にはたしかに学際研究や学際教育の理念がある。だが率直に言って、その理念に見合う実質的な成果は必ず

しも十分ではない。少なくとも組織的な取り組みの成果は乏しいといわざるをえない。加えて「学際」を標榜する京大内の部局は、近年その数を増してきていて、「学際」が人環・総人を特徴づける切り札になりえない状況になっている。となると、新たなアイデアを導入するしか途はない。これが一つ目の問題意識だった。

もう一つは大学院と学部の問題である。人環は広範な学問分野によって構成されていて、研究指導は各専門分野の優秀な研究者を育てることを主眼としている。他方総人では専門家というよりはジェネラリストを育成することがめざされており、カリキュラムもそのことを意識したつくりになっている。現実には総人生は個々の専門分野ごとの勉強をしているわけだが、理念としてはあくまでジェネラリスト養成ということになっている。大学院は専門家養成を行い、学部は高い一般能力をもった人間を養成しようとしている。両者の教育目標は一直線上に並んでいない。二つの目標を同時に実現しようとするのは相当な難題である。この難題を何とかクリアしなくてはならない。これが第二の問題意識だった。

研究科長就任時の私は、第一の問題意識の周辺を始末うろついていたような気がする。私が教養教育の問題に長年取り組んできたことについては先にふれた。そのせいであるにちがいないのだが、あるとき、「教養教育のできる第一線の研究者」というアイデアが浮かんだ。人環育ちの若手研究者は研究の第一線に立ちながら、(人環の教員同様)広義の教養教育に対して意欲と責任感を持っている。そんなイメージである。第一線の研究者であると同時に、まったくの素人相手の授業に意欲と責任感を感じる。この研究者イメージがとてもユニークで斬新であるように思えた。広義の教養教育とはこの場合、人文社会系の教養教育だけでなく、理系基礎教育や外国語教育を含む教育、教員と同じ専門に入る可能性がほとんどない学生を受講者とする教育一般のことを指している。したがって、この研究者イメージは、理系、文系のちがいを問わずに成り立つはずのものだ。つまりこのイメージは部局全体をカバーしうる。

このイメージを中心に置くと、少なくとも他研究科との差異はくっきりしてくるようになる。人環は教養教育に固有の責任と意義を見出している研究者を世に送り出す。このような教育は他研究科ではできない。他研究科は教養教育を自らの

ミッションとしているわけではないからだ。では具体的には何をすればよいか。今年度「大学院生の教育実習」を試行的に実施してみた。全学共通科目の授業1回分を博士後期課程の学生を中心とする若手研究者に担当させてみようという試みだ。この「教育実習」のほか模擬授業や学部授業の担当なども組み合わせた教育プログラムをつくり、実施していくことを通して、「教養教育のできる第一線の研究者」の輩出という理念の実現に近づくことができるのではないかと。

人環についてはそれでよいとして、総人はどうか。総人については、「研究を語る」という教育課題を設定してはどうかというのが、現時点での私の考えである。研究を究めるだけではなく、自らの研究を専門外の他者に語るという課題を学部生に課してはどうか。このアイデアのポイントは「専門外の他者」である。大学院生が「まったくの素人相手」に教育実習を行うのと同じく、学部生は話の通じない「専門外の他者」(具体的にいえば異分野の教員)を相手に自分の研究を説得的に語らねばならない。この学部生のイメージはいかにも総人らしい。課題に応えようとするとき、彼らは自らの専門に拠りつつその専門の垣根を越えようとするにちがいない。これは学際教育の新しいバージョンとさえいえるかもしれない。この教育課題に即した試みとして、これも今年度から試行的に「異分野教員へのプレゼンテーション」を実施している。指導教員も参加する場で、学生が自らの卒論・卒研を異分野の教員に語ろうという試みである。

人環における「大学院生の教育実習」を中心とする教養教育の実践と、総人における「異分野教員へのプレゼンテーション」を中心とする「研究を語る」という教育課題の実践。これら二つの試みを通して、私が当初に抱いていた二つの問題意識にも、部局としてある程度の答えを出したことになるのではないかと考えている。二つの試みが定着すれば、人環・総人は他研究科・学部にはできないことをしていることになるし、同時に人環・総人はともに「学術を非専門家に語る」という教育課題を抱えるということになり、大学院と学部の乖離に悩む必要がなくなる。

鍵は「二つの試みが定着する」ということであるにちがいない。いまそのことがとても気になっている。

(たかはし よしのり)

特集 ご退任を迎えられる先生方から

ニタリア国ものがたり

篠原 資明 (人間科学系)



京都大学の先生たちのうち、気の合いそうな人たちに声をかけて、京大ノビノビ会のようなものを作れたらいいな。そんな夢みtainなことを考えているうちに、いつの間

にか定年を迎えることになってしまいました。でも、それなりにノビノビとやってこられた気もします。だから、これでいいのです。とはいえ、それだけでは、あっさりしすぎですね。そこで、どのようにノビノビできたかを、わずかなりとも綴って、退任の弁とすることにしましょうか。

こんなことをいうと一部の先生方のひんしゆくを買うかもしれませんが、実のところ、一番ノビノビできたのは、授業ででした。とりわけ、2限目の講義科目は最高でした。その秘密は、ニタリア国にあります。何じゃそれは、といわれそうですが、そんな国は、もちろん、どこにもありません。京都大学以外には。

チャオ！ お茶！ の挨拶とともに始まる講義は、そのあいだだけ、ニタリア国に変貌するのです。でも、いきなりではありませんよ。第一回目の授業で、自己紹介します。日本名を記した後、おもむろに続けるのです。実は、ワタクシメ、二重国籍でして、一つは日本国、もう一つはニタリア国。ニタリア名は、モトッキ・シノラーノと申します。そして、Motocchi Scinolano と、それら

しいスペルを綴るのです。さらに、ニタリア国の挨拶を、伝授します。チャオ といったら、お茶と応えるのです、と。

いやあ、京大生は素直ですね。二回目からは、チャオ、と呼びかけると、お茶、と元気に応えてくれます。「おまえら、相当アホやな」といっても、ものともせず、チャオ お茶、の挨拶は続きました。レポートに、「この挨拶も、そろそろ潮時ではないですか」と、やんわりと書いてくれた学生も一人はいました。でも、一人だけにでも、そんなことをいわれると燃えてしまうものです。自分も相当アホやなと独白しつつも、ニタリア風の挨拶は続いたのでした。

そうはいつでも、アホなだけではありませんよ。少しはまじめな思いもあったのです。チャオ Ciao は、イタリア語ではありますが、この挨拶は、けっこうヨーロッパ全域で通用します。その証拠に、イギリス映画の中でも何回か耳にしたことがあるほどです。そして、チャオは、出会ったときも、別れるときも、使われます。出会いも別れも同じくチャオなのです。これを茶人の言葉では、一期一会というのではないか。イタリアと日本が、このような思いつきに乗りやすいワタクシメの中で結びつき、こうしてニタリア国は生まれたのです。

そのようなたわいもないきっかけで生まれたニタリア国でしたが、自分の専門の上からも、いろんなことを考えさせてくれました。専門は、と聞かれたら、哲学・美学と答えることにしています。

美とは何か、芸術とは何か、そのような問いを根底にもつ学問です。実は、哲学の元祖プラトンは、美そのものを探求する学問が哲学だと考えていました。自分の専門を、単に美学とか芸術学だとかいわず、あえて哲学・美学といい続けるのは、そのことを忘れないためでもあります。

芸術のことを哲学的に考える上で、重要な存在といえるのが、フランシス・ベーコンです。17世紀の初めに、ベーコンは、人間の能力を、記憶、想像力、理性の三つに分け、それぞれに歴史、詩、哲学を割り当てました。18世紀になるとベーコン主義を標榜したフランス百科全書派の人たちが、想像力の働きを、詩だけでなく、芸術全般に押し広げたのです。近代的な芸術観の成立にとって、決定的に重要なことだったと、不肖ワタクシメは確信しています。詳細は省きますが、当のベーコンは、現実に飽き足らない精神が想像力によって現実にありえないものを作り上げるのが詩だと考えていました。自分流に敷衍するなら、現実のただ中に、別様の世界を作り上げるのが、詩であり、芸術であるのです。

日本は、近代化の過程で、あまりにもヨーロッパの南をないがしろにしてきたのではないのでしょうか。実のところ、曲がりなりにも一つのヨーロッパというものを実現させたのは、中世であり、その中世ヨーロッパの公用語はラテン語でした。そしてそのラテン語を、語彙の上でも、もっともよく引き継いでいるのがイタリア語なのです。何をいまさらといわれるかもしれませんが、何かにつけてイタリアという国の存在感の希薄さを、ここ日本では感じてしまうのです。もう少し、日本がイタリアという国を敬愛とともに受け入れていたならば、わが国も別様でありえたかもしれない。おそらく、そんな思いがニタリア国を作り出したのでしょう。恐れ多いことながら、ワタクシメの頭の中では、ベーコンにとってのニューアトラン

ティスは、モトッキ・シノラーノにとってのニタリア国だったのです。

だいぶ前のことですが、京大出身の地質学者にすばらしい言葉をいただきました。学問と芸術は、人間に残された最後の道楽だということです。何と深い、そしてノビノビ感あるメッセージでしょうか。ニタリア国に参加してくれた京大生に、いささかなりとも、学問と芸術のノビノビ感が伝えられたとすれば、自分が京大に在籍したことにも意味があるのかな、と勝手ながら考える次第です。

(しのはら もとあき)



「百人一滝」朗読パフォーマンス
(2011年1月、まぶさび展、京都大学総合博物館)にて

特集 ご退任を迎えられる先生方から

厄介な代物

石田 明文 (人間科学系)



京都大学の教壇に立って30年が過ぎようとしている。その間にいろいろなことがあったが、なかでも最近とくに気になるのは、教養教育の行く末である。来年度からはもうその任ではなくなるので、立つ鳥後を

濁さずの言葉通り、余計なことは言わず、黙って立ち去るのが賢明なのかもしれない。それが大人というものであろう。けれどもなぜかもう一度水をかき回してみたい気持ちが、どこからともなく湧きあがってくる。これはどうにもいたしかたない。それで、率直にその気持ちに従わせていただくことにした。

現在、京都大学の教養教育は「教養・共通教育」と呼ばれている。まず、この呼称がしっくりこない。とりわけこの中黒に、どこか焦点の定まらないようなものを感じる。ホームページにはこう説明されている。「教養・共通教育」においては、「先人の学びの発想と展開」のコンテクストおよび「その知と技法を自立的、順次的、体系的に学ぶ」と。さらに『全学共通科目履修の手引き』には、「高等学校教育からの連続性に留意した基礎教育を実施する。その上に専門的知識を修得させ云々」と書かれている。これらを総合すると、その意味するところはこうであろう。教養教育とは、専門教育を受ける前にその〈準備〉として幅広い視野と知識を身につけさせ、それによってさまざまな専門分野に「共通」の土台を提供する基礎教育である、と。しかしはたして教養教育は専門教育の〈準備〉と言えるであろうか。確かに、ホームページや『履修の手引き』には、〈準備〉という言葉そのものは使われていないかもしれない。し

かしそこに見られる教養教育についてのさまざまな説明は、〈準備〉という非明示的な仮定を想定しない限り、整合的に理解することができないように思われる。

限りなく細分化し、領域を広める現代の学問状況のなかで、さまざまな専門領域に「共通」の「体系的」で「調和のとれた」教育がそもそも可能なのか、というような遠大なテーマについて語りたいわけではない。むしろ気になるのは、教養教育と専門教育の関係について、ある特定の想定が非明示的になされているように見えるところである。教養教育は専門教育の〈準備〉であるという非明示的な想定が、はっきりそうと語られないままに、自明なこととして前提とされているように見える。そのことによって、教養教育のもう一つの可能性が、暗黙のうちに覆い隠されてしまっている。「教養・共通教育」の中黒がそれを見えなくさせている。教養教育が専門教育の〈準備〉であるというこの暗黙の前提は、一度は明示的に吟味してみる必要がある。

西欧の教養思想の歴史をたどればわかるように、教養教育は専門教育の〈準備〉ではなく、むしろそのライバルであった。それは常に、学問的閉塞性ないしは偏向性の敵対者であった。より正確にいえば、そのようなライバルとしての確固とした伝統が西欧の教養思想のなかにあり、それが教養教育のもう一つの可能性として、大きな流れをなしてきた。これは大いに参照に値する事実である。

その流れの主要な源泉となったのが、プラトンの同時代人にして批判者イソクラテスである。イソクラテスの名は、今日では、西欧の学問性の始祖となったプラトンの陰に隠れているかに見える。しかしイソクラテスの教養思想はヘレニズム期か

らローマ期にかけてプラトン哲学の影響力を完全に圧倒した。ローマ時代には、キケロがイソクラテスの伝統を継承し、それは、さらに長い歳月を経てイタリア・ルネサンスにも余韻を残した。そればかりではない。ライバルとしての教養教育という思想は、それ以降も、たとえばデカルトの敵対者としてのヴィーコ、ニュートンの自然科学に対するゲーテの自然科学など、さまざまに形を変えながら生きてきた。他にも同じような例はいくつも見出せるであろう。近代教育学の礎石ともいべきルソーは、「学問芸術」の進歩そのものが閉塞をもたらすというパラドクスを洞察し、それを出発点として教育を論じた。ある意味では、西欧の近代思想の全体がこのパラドクスをめぐる動いていたとさえ言えるかもしれない。しかし教養教育が専門教育の〈準備〉であるという想定が暗黙のうちになされるとき、このような教養思想のあり方のすべてが見えなくなってしまう。

専門研究とは、対象をコンテキストから原理的に切り離して取扱う研究のあり方である。話を簡単にするために、一応そのように考えてみよう。専門研究の強みも、またその弱点もこの脱コンテキスト性にある。強みについてはあまりにも明らかであり、改めて語る必要などない。他方、その弱点とは何であろうか。教養教育の問題のすべてはこの一点にかかっている。コンテキスト（たとえば「環境」）を原理的に切り離すという思考方式が社会や個人の心にもたらすかというのが、どれほど根深く、解決困難な問題であるかということに思い至ったとき、ライバルとしての教養教育という考え方が現れる。それは、切り離されたコンテキストの痕跡をたどり、このような思考の転換にともなって生じるアイデンティティーの動揺を受け入れ、さらにはそれを自家薬籠中のものにする試みとも言えよう。そのかぎりでは教養教育は、専門教育にとってのライバルなのだ。そればかりか、ときには攪乱因子、厄介な代物でさえありうる。なすべきことは、このライバル性を打ち消すことではなく、活かすことであろう。教養教育を専門教育のコントロール下に置こうとする試みが、大学にとってどれほどの自滅行為であるか、一度は熟慮してみる必要があるように思える。

しかし教養教育全般の話はこのくらいにして、

私が長い年月担当させてもらった語学教育について少し付け加えて、稿を終えることとしたい。語学教育、とりわけ英語以外の初修外国語は、費用対効果を考えると、これほど効率の悪いものはないだろう。それほどまでに厄介な代物である。初修外国語を削減しようという考えが出てくるのも理解できる。しかしさらにその先を考えてみてほしい。学問研究は言語をとおしてなされるということ。すべての物事を言語化できるわけではない。むしろその反対であろう。しかしながら、学問研究を言語から切り離すこともまたできない。言語は、学問にとって空気のごときものである。とすれば言語に対する適切な感性は、大学教育にとって計り知れないほどの重要性をもっているはずだ。どのような言語も透明な記号ではなく、それぞれの手触りや味わいをもっている。確かに、今日の世界では英語は比類のない有用性と汎用性をもってはいる。しかし、外国語といえはすべてが英語のようなものではないし、また英語が透明な記号であるわけでもない。すべての言語はそれ自身の文化と歴史を背負っている。しかし外国語を一つしか知らないと、そのことが見えなくなってしまう。英語もまた一つの特殊な言語であることにはかわりはない。物にはいろいろな手触りがあり、味わいがある。実際に手に取って食べたことがあるかどうか、この違いは大きい。言語に対する感覚は、経験をとおしてしか養うことができないのだ。最近「グローバル人材」とか、「エフォート率」とか、「インセンティブ」とか、学内でも英単語が盛んに用いられる。しかしそれらの単語のうちどれが、それがたんに英語であるという理由でその空疎さを覆い隠されているにすぎないかを見抜く言語感覚を養ってくれるのは、やはり教養教育しかないであろう。

最後に、空気という厄介な代物を取り除いて、真空の中を高速で飛翔すること夢想した有名な鳩のたとえ話を引いて、稿を閉じることにしたい。「身軽な鳩は、自由に風を切って飛びながらも、空気の抵抗を感じるので、空気のない空間であればずっとうまく飛べるの」と思いこむかもしれない。」大学にとっての「空気」である言語が、このままやせ細ってしまわないことを念ずる。

(いしだ あきふみ)

特集 ご退任を迎えられる先生方から

運動医科学からの提言

森谷 敏夫 (認知情報学系)



11年間のアメリカ留学、教育・研究を終えて京大教養部に赴任して、もう31年も経ってしまった。個性あふれる学生諸君が年々減ってきた感じで、か細い学生が大変目につくようになったの

は、小生だけでしょうか。30年前にはめったに見かけなかった講義中の「爆睡」、出席を取った後の「こそこそ隠れ退室」、60点ギリギリの単位取得、等々が気になります。300人近くが受講する健康科学でここ数年、栄養摂取状態と鬱傾向に関する調査をやっていますが、約一割が「鬱傾向」と判定されます。標準的な栄養調査結果では、男子学生も女子学生も1日当たりの推奨エネルギー摂取量を概ね200～300キロカロリー下回っているのが大部分で、推奨量を下回る場合に赤字でプリントされる総エネルギー摂取量、糖質、タンパク質、脂質、ビタミン、ミネラルなどの項目がほぼすべて赤字で埋まります。たまに、すべてが真っ黒に印刷されるのは体育系のスポーツクラブに所属する学生さんたちです。鬱傾向の学生諸君に共通しているのは朝食の欠食と運動不足です。

教員も学生も大学生活を元気に謳歌するための基本となるのはまず「食」です。朝食は絶対に欠かさないことが第一条件です。食べ物が少なくなると、からだは省エネモードに入り、基礎代謝や

活動量を自動的に低くして、飢餓に備えるのです。実験用のモルモットも若いダイエット専門の女子学生さんたちも食事の量を減らすとよく眠るようになります。朝の電車のつり革にぶら下がりながらコックリコックリしているサラリーマン諸君、爆睡状態のヤングレディ。彼らはひたすら生きるために寝ているのです。おまけに若者の流行は三無主義。無関心、無感動、無気力、なんとも情けないお話。脳のエネルギーは糖質、つまりブドウ糖が唯一の脳のエネルギーなのです。ですから、朝食にごはん、パン、フルーツなどの糖質の栄養を補給することが脳の働きを活性化してくれるのです。「食」と言う字は「人を良くする」と書きます。からだで食わずに、頭で考えて食事して欲しいと思います。

次に、生活習慣病の予防を目指し絶対に肥満しないことが第2の条件です。数年前から体脂肪率が男性25%以上、女性30%以上で、かつ一定以上の内臓脂肪がある場合は、「肥満症」と判定されます。肥満症、糖尿病、脂質異常症、高血圧症の4つは、「死の四重奏」とも呼ばれ、死への序曲が無自覚、無痛で流れ始めます。動脈硬化をはじめ、高血圧、糖尿病などの生活習慣病を引き起こす悪い遺伝子の大半は、内臓脂肪から放出されるのです。受験勉強で運動不足、すでに腹がたるんでいる学生諸君は平均的には2割近くもいます。40、50歳代の教職員では35～40%がメタボリック症候群にかかっているのが現状です。ここで一句「カ

ラダのたるみは心のたるみ」。心機一転して、からだも心もリフレッシュしてみませんか。その為にはまず、運動です。筋肉は私たちの体の約4割を占め、脂肪や糖質のエネルギーを最も多量に使う“臓器”なのです。最近の日本人は老若男女を問わず、この筋肉をあまり使わなくなりました。その結果、筋肉が脂肪やブドウ糖（血糖）をうまく消費できなく、その処理能力も大幅に低下しているのです。ですから、少しご飯を食べただけで血糖値があがる。その上がった血糖値を見て、「糖分の取り過ぎだからご飯の量を減らせ」とアドバイスするお医者さんがいますが、まったくナンセンスです。米や砂糖などを食べ過ぎて糖尿病になるなら昔の人はもっと糖尿病に罹っていた筈です。宮沢賢治の詩集「雨ニモマケズ」にも「。。一日玄米四合と味噌と少しの野菜を食べ。。。」と書かれています。これだけの炭水化物を食べていた当時、糖尿病の患者はほとんどいなかったのです。現在は糖尿病の患者さんは軽く1000万人を超え、昭和35年と比べると患者さんが40倍以上もいることになり、遺伝だけでは全く説明できないのです。糖尿病は非感染性の疾患で人にはうつらない病気です。

最新の脳神経科学の知見では、運動により学習・記憶を司る海馬での脳由来神経栄養因子（BDNF: Brain Derived Neurotrophic Factors）が増加することが明らかにされています。その生理機能は神経可塑性、神経栄養伝達、学習能力改善、脳神経細胞保護、及び食欲・代謝調節の多岐にわたるものです。最近のヒト試験でも血中BDNFは、主な鬱病や2型糖尿病患者で低下しているが、一過性の運動は海馬と大脳皮質のBDNF産生を増加させることが明らかとなっています。一方、海馬は老齢期に委縮し、記憶障害や認知症のリスクを高めることが報告されていますが、海馬と側頭葉の容積は体力の高い成人の方が大きく、運動トレ

ニングにより海馬の血液環流が増加することも示されています。最近の脳CTスキャンを駆使した研究では120名の高齢者を対象に無作為、コントロール試験を行った結果、有酸素運動が加齢に伴う海馬容積減少の1、2年分に相当する2%を可逆的に増加させ、空間記憶の改善をもたらしたのです。つまり、運動は体力の維持増進や肥満、糖尿病、脳心臓血管系疾患などの生活習慣病の予防・改善のみならず、脳・認知機能にも素晴らしい効果を持っているのです。こんな講義も終わりを迎えることになりました。幸い、小生の健康科学の講義を受けた学生諸君が軽く3万人を超えたようです。31年間の賜物であり、誇りに思っています。

（もりたに としお）



森谷敏夫著『京大の筋肉』（デジタルアーカイブズ, 2015）より

特集 ご退任を迎えられる先生方から

数学ことはじめ

宇敷 重廣 (認知情報学系)



私が学生だった頃、はるか彼方から送られてくるラジオ放送を受信し、見知らぬ異国に思いを馳せたことがある。微妙にダイヤルを操作してチューニングをする。ほとんど雑音としか聞こえないのだが、

注意を集中して、かすかにでも人の声が聞こえるところを探し当て、さらに細かくダイヤルを調節していくと、やがて明瞭に聞き取れるようになることもあった。たいていは、言葉がわからず理解ができなかった。

数学の諸概念は直接目に見えるものではないので、手軽に鑑賞する訳には行かない。なにかのきっかけで、面白いものが有ると知り、それがどんなものか興味がわいても、数学の場合、それを学ぶのは容易ではない。数学書や数学の論文は、根性を据えて読もうとしても、なかなか読めないものである。数学者にとっても、数学の論文を解説するのは難事である。

長編小説を読むのに似ていなくもない。主人公の生い立ちや、時代背景、風景など、様々な要素が述べられ、読者が少しずつ物語にひきこまれていく。相当な時間をかけて読み進んでいくと、やがて、ストーリーが展開していき、ついには手に汗にぎる波瀾万丈となる。

数学の場合も、基礎的諸概念を積み重ねて深い

理論に分け入っていく途上で、味気ない用語や公式に煩わされることが多く、入り口にたどり着くまでにくたびれ果ててしまうこともある。数学の学び方は、登山にたとえられることも多い。素晴らしい眺望のえられる高原にいたるには、見通しのきかない長いながい道をたどらねばならない。一度でも苦勞の果てに山頂を極める快感を味わったら、麓の長い道のりも楽しみのうちになるのかもしれない。

大概の数学的概念は数学者が発見あるいは発明したものであり、自然界には存在しない。そうしたものを表す用語はそのつど発明しなければならない。名前をつけておかなければコミュニケーションが困難だからだ。数学者の頭の中に浮かぶ感覚なり、観念なり、想念のようなものに、記号を工夫し、名称をつけて概念を整理し、操作可能にするのである。数学的对象を言葉で表現するのは、きわめて困難な作業だ。研究をする数学者は経験すると思うが、言葉にならない思考を経てある種の洞察にたどり着く、そしてそれを定式化し、形式化し、計算に還元し、言語化する。簡単に見える一つの定義でもそうしたプロセスの結晶なのである。

とらえどころのない抽象概念を表現する用語としては、日常用語を比喩のようにして使うことも多いのだが、現実に類似したものがないときは、その概念を発見した人の名前を流用することもしばしばある。たいていは、研究仲間たちの間での

呼び方が定着したものであろう。

固有名詞を冠した名称だけからその実体を推測することは不可能である。それゆえ、その用語の定義をはっきりさせなければならない。引用文献をたよりにしようとしても、さらに引用をたどらねばならなかったりする。数学の世界では、先達に直接師事して手ほどきを受ける以外には、高度な理論を学ぶ手段はないといって過言ではない。独学で研究をする数学者は皆無ではないにしても稀であり、例外的である。そんなわけで、数学を学ぶ者、研究する者にとって、研究集会やディスカッションが本質的に重要なのである。

私は、幸いにも、ルネ・トム教授に師事する機会をえた。留学してわかったのは、独学で文献にたよって数学を学ぶということは普通ではないということである。日本にいて、トムの論文に引用されている文献がほとんど入手できず、論文の解読に苦勞していたのだが、トム教授の研究室の本棚には、その参考文献がずらりと並んでいた。じつは、彼は自分の手元にある文献を安易に使っていたのであった。

トム教授の師匠はアンリ・カルタン、その師匠がモンテル、さらにさかのぼるとボレル、ルベーグ、ダルブー、ポアッソンを経て、ラグランジュ、オイラー、ベルヌーイとなっていて、ヨーロッパ数学の源流につらなっている。

私の考えでは、数学研究の中心は、新しい概念や未知の現象を発見することである。人類のだれも思い至らなかったことを考えだすのが仕事である。私見であるが、脳の未使用の部分を開発し活用する必要があるように思う。なにしろ考えたことのないことを考えるのであるから、そうでもしないとどうすればいいのかわかるはずがない。

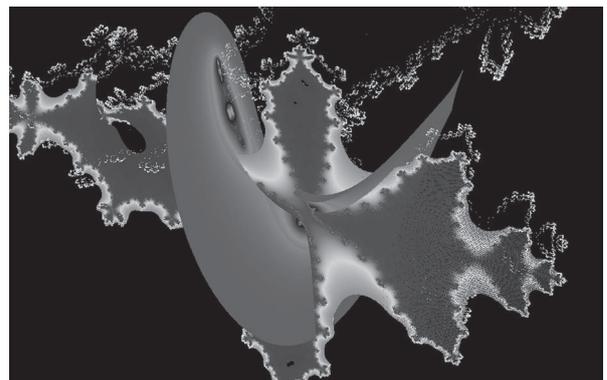
ふと何かしら疑問のようなものが頭の隅をよぎったらそれをのがさず、じっくりと向き合っ取り組む。というか、ふとした疑問が頭から離れ

なくなり、いつまでも気になって仕方がないという状態になる。そうこうしているうちに、思っても見なかったことがわかってくる、となったらしめたものである。このようなことは滅多にないが、ぼんやりしては気づかぬような、論理の裂け目のようなものがあれば、そこに着目して、思い切ってぐいとこじ開けると、その先に思いがけない光景がひらけていたりする。

とらえどころのない抽象概念を言葉にするには大変な苦勞がともなう。また、自分にははっきりと「見えて」いるものでも、言葉で説明するのはもどかしく、なかなか困難である。数学者はいつもコミュニケーションに難儀しているのである。

少しでも目に見えるようにしたいと思い、コンピュータの助けをかり、時代のテクノロジーを利用して画像や映像、はては仮想現実まで試みた。2次元のコンピュータ・グラフィックスはおおいに役立ったが、3次元以上のものについては、まだまだ発展途上である。

(うしき しげひろ)



高次元のフラクタルの図

特集 ご退任を迎えられる先生方から

順風満帆

森本 芳則 (認知情報学系)



博士課程の途中で幸運にも名古屋で助手職に就くことができた。当時の数学を専攻する大学院生としては、かなり普通のことであったが、アカデミックポストの数は限ら

れており、すぐにやって来た就職難に直面し苦勞している、その後の世代の方々には早く席を開かなければならないというプレッシャーを感じていた。助手の職務は、教育補助ではなく研究成果を挙げることであり、結果を出せない助手は撤退すべきという上司の言葉もかなり堪え、ポストを維持しつつフランスに留学する道を選択した。留学中に、大学院時代の指導教授の急逝もあり、当時、フランスでの最高学位であった国家博士号を1年半の間に何とか取得して帰国することができた。学位取得で研究者としてのスタートラインに漸く辿り着いたものの、次のステップアップには更に数年間、助手としての研鑽が必要であった。

大学院時代からの研究テーマは、解に特異性をもつ偏微分方程式の一般論であった。ノーベル賞が対象としない数学分野で、それに匹敵するといわれるフィールズ賞を受賞したヘルマンダー、C. フェファーマン等が、その頃、華々しく活躍していた。彼らの一般論を理解しようとする間に、「道遠くして陽が暮れる」と焦りを感じていた30代半ばに、当時の京大教養部にポストを得ることができた。これもまた、私にとって実力以上に幸

運であったが、「教養部牧場論」(学生が、放牧場の羊のように自由に動き周り、好きなことをやり、たまに崖から落ちるものもいても教員は静かに見守れば良い)といった牧歌的な雰囲気は、1991年に実施された大学設置基準の大綱化により、瞬く間に様変わりしていった。この年、大学院人間・環境学研究科が設置され、翌年10月にはすべての教養部教員が、総合人間学部か、大学院人間・環境学研究科のいずれかの配属となった。私自身は、講座単位での異分野の統合を目指した大学院の配属となり、時代の急な流れに翻弄されることとなった。しかし幸い、(現在も続く)全学教育科目としての数学教育と学部教育を実施するための総合人間学部の基礎科学科に所属した数学教員と連携協力して、大学初年度から博士後期課程3年までの9年間の一貫教育を模索できたことは、数学研究への視野を広げる意味でも良い経験であった。また、大綱化による変革の第一期の途中で大学院から総合人間学部に配置換えをしてもらい、数学・数理情報学を専門とする同僚と学部運営に関わったことも、今となっては良い思い出である。

学部に配置換えしてもらって直ぐに、やってきた第2の荒波は大学院重点化であった。2003年に総合人間学部を大学院人間・環境学研究科に一体化させることで、京都大学すべての学部の重点化は完成されたが、全学共通教育としての数学教育を担当するすべての教員を人間・環境学の理念に包括するには規模として無理があり、結局、総合人間学部所属の全定員の理学研究科への移籍が行

われた。私自身は、多くの同僚を失って大学院人間・環境学研究科に舞い戻ることとなった。改組されて拡大した人間・環境学研究科でも専攻長などを務めさせていただき、会議などを通して、大学全体の運営の実態を垣間見ることができたことは貴重な体験であった。それにも増して、博士学位論文の審査結果の要旨などのチェックを目的とした考査委員会を通算6年間、哲学、教育学、芸術学、英独仏露文学、言語学、精神医学、社会学、健康科学、生理学、脳科学など数学以外の幅広い分野での大学院教育の成果を知ることができたことは、望外の喜びであった。

ここまでは、タイトルとはあまり関係のない内容が綴られたと見えるかもしれない。今まで述べた、全学共通教育の職責と所属組織の改変が続いた京都へ来てからの29年間は、一見すると研究には適した環境ではなかった。しかし、ストレス イズ サクセスという言葉があるように、私にとっては優秀な京都大学の学生を相手に、教員として恥ずかしくない研究を続けたいという意思是プラスに働いてくれたように思う。数学者は、自分の研究室を構えたら仕事ができるものではなく、生涯、一兵卒で自分の能力だけが勝負であるというのは、フランス留学中に世話になったチュニジア出身のズイリー氏の言葉である。フィールズ賞を受賞するクラスの研究者に比べたら、はるかに劣る才能にしか恵まれない私であったが、大学と大学院で受けた教授達の指導と、大学院での先輩との共同研究、京都へ来てからの後輩、院生との共同研究は幸運の賜物であった。50代半ばから始めたボルツマン方程式の研究は、大学に入学する前に専門としたかった物理学の気体運動論に関連するものであり、フランス留学時代に出会った仏国籍の中国人数学者徐超江氏との共同研究がきっかけであった。香港城市大学の楊彤氏、当時客員教授として滞在していた鶴飼正二氏（東工大名誉教

授）と研究に着手し、その後、仏国籍のインド人数学者アレクサンドル氏が加わった。5人による英語、仏語、日本語、中国語が飛び交う国際色豊かな共同研究であったが、この分野でのブレイクスルーな研究結果を得ることとなり、私にとっては奇跡といえる幸運であった。大学で勤務する者として当然多くの困難を経験したが、幸いにも研究者としては順風満帆な日々を過ごすことができた。最後ではあるが、京都大学で、日本の科学技術の水準を維持・発展させるための全学共通教育に携わることができたことと、数学の教育・研究者としての誇りを失わずに過ごせたことを心より感謝して一文を終える。

(もりもと よしのり)



2005年11月、ボルツマン方程式の研究を開始した香港にて



2010年6月、共同研究者と時計台前にて
(左から、Alexandre氏、Morimoto、Ukai氏、Xu氏、Yang氏)

特集 ご退任を迎えられる先生方から

羽田記念館で学んだこと

松浦 茂 (文化環境学系)



京都大学文学部にはユーラシア文化研究センター（旧内陸アジア研究所）という附属施設がある。それは京都大学の元総長羽田亨博士の業績を記念して建てられた施設

で、羽田記念館という方が通りがよい。北区上賀茂にある羽田邸のすぐ横に隣接している。わたしは1978年に京都大学の文学研究科博士課程（東洋史学専攻）を終えた後、羽田記念館に教務補佐員として勤務した。大学からはほどよい距離に離れており、しかも通常は用務員さんと二人だけだったので、そこでは大学院のとき感じていたプレッシャーから解放されて、自由に自分らしくすごすことができた。

上司にあたる主事は、文学部西南アジア史学研究室の主任教授、故本田實信先生である。先生は一言でいえば公正無私であり、教育と研究に高い識見をそなえた方であった。忙しい本務をこなしながら、ほぼ週に1日は羽田記念館に出てこられた。先生にとっては仕事の一部であっただろうが、それを楽しんでいるふうでもあった。そのおかげで先生から多くの貴重な話をうかがえたことは、何にも優る財産となっている。

羽田記念館における研究テーマは、世界中にある満洲語文献とそれにもとづく研究論文を調査することであった。それは羽田記念館の蔵書を整備

する上で必要なだけでなく、わたし自身の研究にも不可欠な作業である。その仕事が進捗してくると、東京にある東洋文庫や国立国会図書館、東京大学図書館などに調査に行くことを命ぜられた。とくに東洋文庫では特別に許可してもらい、書庫の中に直接入って調査を行なった。建物の上層から下層まで隙間なく置かれた書棚に、蔵書がびっしり列べられている様は壮観で、これほどまですごい図書館があるのかと感動したものである。また当時満洲語文献の研究で世界をリードしていた、同文庫の清代史研究室に出入りできるようになったのもこのころからである。それらはみな、優れた研究者と機関を知ってほしいという本田先生の親心から実現したことである。

わたしは羽田記念館に3年間勤めた後、鹿児島大学法文学部に採用された。それから11年後の1992年4月に京都大学教養部に赴任した。そして着任して早々に考えてもみなかったことが現実になる。当時の文部省にはまだ在外研究員の制度があり、毎年各大学から数名が選ばれて外国に海外研修に出かけていた。前任校では希望者が多くて、その順番はなかなか回ってきそうになかった。教養部でその募集があったときにも、それに応募はしてみたが、とりあえず列に並んでおこうというくらいの気持ちであった。ところが幸運にも、国際交流委員会で93年度の候補者に選ばれた。その年は希望者が少なく、上位3人の抽選になったと記憶している。抽選をするのは委員会の方針で

あり、上位のものはみな同等で優劣はつけられないという考えからである。

研修先を選択する際に東洋史学では欧米の機関を希望する人が多く、中国を選択する人はまれであった。中国との交流はまだ本格化しておらず、しかもその経済状況は今とは比較にならなかったからである。それにもかかわらずわたしは中国で研修することにした。このころ中国では「改革開放」のスローガンが叫ばれて、一部の機関は外国人にも解放されるようになっていた。わたしも少し前から東洋文庫清代史研究室が中国の遼寧社会科学院との間に結んだ国際共同研究に参加して、清代の満洲語檔案（当時の行政文書）に関して現地調査を始めていた。89年には遼寧省檔案館にひと月近く滞在して、満洲語檔案というものがどういう形式と内容をもつのか大体理解することができた。さらに北京の第一歴史檔案館にも同種の檔案が存在することが報告されており、それはまだほとんど手つかずで、詳細は不明であったが、上記の檔案と同等かもしくはそれ以上の価値をもつと推定できた。これらの檔案は既存の文献には見えない記事を大量に含んでおり、今までの研究を大きく変える可能性を秘めていた。自ら選択した道とはいえ、期待と不安の入りまじる出発であった。

わたしが中国に行っていた期間は、93年6月から94年3月までである。遼寧省瀋陽市と北京市に滞在して現地の社会科学院に受け入れてもらい、それ以外の時間は各地の檔案館に通った。とくに第一歴史檔案館で調査した檔案は期待した以上で、檔案を読んでは重要な箇所を書き写すという日々であった。調査は半年近くに及んだが、羽田記念館のときから慣れ親しんだことなので、苦にはならなかった。むしろ知らないことが次から次に出てきて毎日わくわくしていた。結局、在外研究の期間だけでは仕事は終わらず、帰国後数年間は、夏休みなどの短期の休日を利用して第一歴

史檔案館で調査を続行することになった。

以上のように、羽田記念館はわたしの研究者人生が始まり、その後の方向が決定したところであった。

教員になって以来、わたしの生活は自宅と大学を往復する単調な毎日の繰り返しであった。今回原稿を求められてもすぐに思いつくことはなく、何を書いたらいいか困ってしまったくらいである。しかしそうした暮らし方は、自分には合っており飽きることはない。現在までそのような生き方ができたのは、家族と同僚である教職員の皆様のおかげと、感謝をしている。最後に、皆様の今後益々のご発展とご健勝をお祈り申し上げる。

（まつうら しげる）



国際シンポジウム（函館）



三朝温泉にて

特集 ご退任を迎えられる先生方から

吉田山雑感

川島 昭夫 (国際文明学系)



「紅萌ゆる岡の花」の花は何の花か。いま吉田山に上っても、とりたてて赤い花が目にとまることはない。秋里籬島の『都名所図会』(安永9年)の「吉田宮齋場所」の項には、「弥生の頃は山躑躅咲乱れて都の貴賤童など引具しわりごさえをひらき遅日を倦ずして興に乗ず」とあるから、紅に萌えていたのはあるいはツツジであったのかも知れない。もっとも、「早緑匂う岸の色」は明らかに吉田山のことではないのだから、「岡の花」の岡が吉田山であるとは限らない。というより、吉田山の山上には月がかかるのを眺められない。岡も岸も、都のどこか別の場所にもとめなければならないのかも知れない。それでも『逍遙の歌』の最終第十一連は、「今逍遙に月白く静かに照れり吉田山」と終わっているということは、逍遙の最後の到達地点は吉田山であったということになる。はたして赤い花はツツジか否か。

もうひとつ私のかねてからの疑問は、そもそも吉田山は山なのだろうかということである。先にあげた『都名所図会』は、吉田宮が「神楽岡」にあり、「当所は一面の岡山にして峻しからず」として、それが吉田山にあるとは記していない。他に参照すべき文献も手もとにはないが、ウィキペディアの吉田山の項には「歴史的には神楽岡」として

いる。吉田山の名称が、それほど古くはないということを行っているのだろう。これはあてずっぽうだが、もしかすると、「吉田山」を定着させたのは三高の生徒たちと「逍遙の歌」だったのかも知れない。標高は105メートル(ただしこれは水準点の置かれた位置の高さで、最高地点はそれより高い125メートルであるとする記述もある)、これは海拔だから麓からの高さはもっと低い。映画「ウェールズの山」のように、標高100フィート以上という定義をもってすれ、即刻はじかれてしまう。もっとも日本には、10メートルにも満たない山もあるそうだから、吉田山が山であっていいわけではない。

私が吉田山は山かと疑念を抱いたのは、学生時代に白川沿いの浄土寺に下宿をしていたため、教養部時代には、毎日吉田山を越えて大学に通っていたからである。吉田山の東側は緩斜面で、かなり上まで民家や寺院建築などで埋めつくされていて、その間の道を右に折れ左に曲がっていつのまにか頂上近くに到達する。これは山なのかと。私の毎日の通路が山なのかと釈然としなかったということだ。もうひとつ不思議なことがあって、行きも帰りも決まった道をたどっていたのだが、それは同じ道というわけではなく、行きと帰りの道が違っていった。どうしてそんなことになるのか。しばらくの間、それぞれの道のつながりを理解することができなかったのである。いくつもある曲

がり角のどれかをつねに無意識に曲がっていたからだろう。

吉田山の東斜面に緑の色の屋根をもつ建物があって、麓からいつもそれを眺めて不思議に思っていた。どう見ても銅が緑青をふいた色に見えるのだが、そんな屋根をもつ建物は神社の社殿以外に考えられなかった。遠くから見る限り、屋根はいくつも整然とならんでいる。はたして神社が整列しているようなものがあるだろうか。

いまではそれが、京都のある実業家が昭和初期に建築した、銅葺き屋根の借家住宅群であることを知っている、当時はそうしたことを教えてくれる人も本もなかった。一度正体をつきとめようとして、その方角に吉田山の道を登っていったことがある。ところが行く道行く道、行きどまりで、結局どうしても現地にとどりつけなかった。いま地図を確かめてみるに、迷うはずのない道なのだがなぜか行く手を阻まれてしまうのである。ひょっとすると、本当は行きついていたのに、目にしたものが想像とかけ離れていたのだから、それと気づかずにさまよっていたのかも知れない。とにかく、吉田山の道は、どれも、どこにも続いていないという感覚が、外傷のように長く残った。吉田山は私には山というより迷路として印象づけられている。

京都大学の全学共通科目では、旧E号館の上階の教室を使用することが多かった。教壇で授業を行っているさいにも、窓から吉田山が目に入る。あなたがたが授業を受けているこの教室は大学でいちばん眺めのよい部屋だから、私の話に倦んだら窓の外でも眺めなさいと学生にも勧めた。授業時間の前後には、非常階段から身を乗り出して、吉田山の木々を飽かず眺めることが多かった。年齢とともに衰えていった視力のせいで、細部まで見分けることが難しくなっていたが、それでも春

は春の、秋は秋の、木の葉の色の複雑精妙なことにいつも驚かされた。大学で教えた最後の十年間は、会心のことがない鬱々とした時期が続いたので、ずいぶんそれに慰められたように思う。山の色が、空の色が、ひたすら綺麗だなどとは若い頃はまったく気がつかなかった。不思議としかいいようがない。若いから多感だとはかぎらない。年をとるのもよいものだと思えるようになった。

吉田山には、そうたびたびというわけではないが、節分や、花見やとあって、その後も一人で、あるいは学生と連れだって、おりにふれ上ったが、いつも真如堂を経由して黒谷寺へか、あるいは宗忠神社の角を右に折れてだらだらと神楽岡を南に下るか、どちらにしても最後は岡崎に下りる決まった道を通ったので、ただの散策に過ぎない。結局学生時代からの、吉田山の謎をいまだに解明しないままである。退職の年を迎え、吉田を去るにあたって、吉田山「山上」に冒険を置き忘れてゆくような感情にとらわれている。

(かわしま あきお)

特集 ご退任を迎えられる先生方から

「いつか来た道」を振り返って—三つの大きな出来事—

丸橋 良雄 (国際文明学系)



ご縁があって京都大学に採用していただいたのは、平成元年の4月1日のことであった。あれからおおむね27年が経過しようとしているが、この数年の間に諸先輩が定年退職を迎えられる姿を見るにつけても、自分も「いつか行く道」という思いがますます強くなってきた。振りかえって考えると、四半世紀以上の間、今でも記憶に残る大きな出来事が三つあった。

一つ目は教養部から総合人間学部へ改組された時である。教養部時代は自由な学風を謳歌できた非常にのどかな時代であった。一般教養の英語科目のみ担当していたので、自分の専門分野の研究に専念することができた。研究や教育の合間を縫って親しい同僚と毎週のように酒を酌み交わしながら、大学の英語教育のあり方や文学談義にふけったり、春は桜を秋には紅葉をとというように四季折々の風情を満喫でき、本当に古き良き時代であった。今振り返ると、あの頃が一番懐かしく楽しかったように思われる。

しかしながら、そういう楽しさとは裏腹に、我々英語教員が抱えていた唯一の頭の痛い問題は再履修者数の多さであった。その異常な数が災いして、2年生の英語の選択クラスでは定員が平均で60名以上は当たり前で、中には100名を超える受講生を受け入れざるを得ないこともあった。大人数の学生を受け入れた教員は、神様、仏様などと学生か

ら半ば支持され、半ば揶揄されることがあったが、これほどの大人数ではまともな講読の授業などできなかったのである。改組されて総合人間学部ができてからも、何ら積極的に改善することなく放置しておいた付けがたまりにたまって、かつてのC群委員会（後の外国語教育専門委員会）では歴代の英語教室主任は屈辱感を味わった。他学部から選出された委員の先生方から毎回手厳しいバッシングを受け、その報告を主任から受けるたびに私は個人的に非常に腹立たしい思いがしたが、自業自得である。いずれ私が英語教室の主任になった時には二度とそのような屈辱感を味わいたくないと、強く心に決めたのはまさにその頃のことであった。たまりかねた当時の委員長から、再履修者数を抜本的に減らすための対策を至急考えるように提案されたのである。

それを受けて、平成13年度から自学自習型（教室なし）のCALLを、主として再履修者対策に初めて導入した。導入当初は「手抜き授業だ！」などという全学からの批判を危惧した一部の英語教員からも慎重論が出た。というのも、教員も学生も毎週教室に行くことなく、半年にせいぜい3、4回程度大教室に行って、学生がきちんと学習しているかチェックするためにテストを行い、その結果と学習履歴により成績をつけるというものであったからである。現在ではe-learningやCALLの導入は当たり前であるが、当時はまだまだ懐疑的で、そういう批判的な空気が支配的であった。しかしながら、それに屈することなく信念を持って

CALL 導入に踏み切ったのが本学の名誉教授である水光雅則先生である。彼の先見の明と英断のおかげでその後履修者数を短期間で激減させ、クラスサイズも随分と小さくできたのである。遅ればせながら、英語教育を大きく改善できたという自負が我々にはあった。

二つ目の大きな出来事は、平成 18 年度に「学術研究に資する英語教育」というものを京都大学における英語の新カリキュラムとして発表したことである。それまで明確な教育理念や目的をもたずにみんなバラバラでやってきたことに対する反省から、学術研究型の本学にふさわしい内容とレベルを考慮して、学術的涵養と学術的言語技能を養うことを目的として、英語科目を再整理したのである。この新カリキュラムの作成に当たっては上記の水光雅則先生と、私が敬愛する田地野彰現国際高等教育院教授のお二人の尽力に負うところが大きい。市川団十郎が不在な今、田地野彰先生は西の雄である坂田藤十郎に匹敵する名優であり、梨園の世界ならぬ大学の英語教育界を今や牽引している立役者だと言っても決して過言ではない。主として、これらお二人によって企画・立案された「学術研究に資する英語教育」という理念はまさに学術研究型の大学の代名詞となり、この理念を高く評価し継承している地方の国立大学もいくつみられる。その後 7 年近くは、全学共通教育実施責任部局としての人・環の英語部会は比較的順調な運営ができていた。全学から選出された委員の先生方が構成員である英語部会会議では、毎回特に異論も出ず平和裏に終わり、教養部時代のような屈辱に満ちた時代はもはや過去のものとなり、我々英語教員にとっていわば Pax Romana の時代をつかの間享受しているように思われた。だが、それが幻想であったことが後に分かった。

三つ目の大きな出来事は平成 25 年に国際高等教育院が設立されたことである。その目的は、現行の全学共通科目の中身を再検証して、より良い

ものに改善できるように、全学で知恵を出し合って監視していこうというものである。英語科目に関しても改善要求があり、次年度からカリキュラムの中身が大きく変わるが、この変更にはもちろんプラス面とマイナス面がある。プラス面は、教科書の中身やレベル、成績評価の基準が担当教員によってバラバラであり、そのために不公平感をもつ受講生が少なからずいたようだが、次年度からの改革ではレベルの統一化を図ることを主眼に置いているので、その点ずいぶんと改善できると思う。マイナス面は、たとえば金曜日の 3 時限目に、同じ学部の 1 回生の英語の授業を 10 数コマ分講義して埋めるという時間割作成上極めて困難な問題と、我々が一貫して批判的であった共通教材の使用をある程度余儀なくされるという点である。改革には通例痛みが伴うが、本学の英語教育をより良いものに改善するという崇高な目的のために、英語教員が全員一丸となって協力し合って、安定した運営をしていただくことを心から願っている。

これまで 27 年近く京都大学でお世話になったが、私は依然としてこの大学に強い愛着を持っている。このキャンパスでこれまで出会った皆さまとの良き思い出が今でも脳裏に去来する。いろいろな学部出身のそれぞれの分野で御活躍の著名な先生方、有能な事務職員の皆さま方には、言葉で言い表せないくらいのご厚情と恩義を受けた。「いつか来た道」を今しみじみと振り返りながら、もしもう一度生まれ変わることができれば、私はやはり同じ職業に就き、この大学で、これまで大変お世話になった先生方や事務職員の皆さまと再び一緒に仕事をしたいと、心から願っている。定年退職を迎えた愚かな人間の戯言であり、所詮叶わぬ夢であるが、再会できる日がやってくるまで、どうぞ皆さまお元気でお過ごしください。ありがとうございました。

(まるはし よしお)

特集 外から見た総人・人環

人環は文理融合をいかに実現させるべきか

高橋 義人 (平安女学院大学国際観光学部特任教授)



今年の6月8日、文科省から驚くべき通知が全国立大学に対して出された。その3頁には、「特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については…組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に

取り組むよう努めることとする」とある。要するに文・法・経済・教育の文系諸学部は廃止か再編成せよ、というのである。この通知を新聞で初めて知った私は、わが目を疑った。日本政府の文教政策はこれほど次元が低いのか、日本から総合大学をなくそうとするのか、政府は、金のかかる理系諸学部の手話はみるが、文系は私立大学に任せようという考えか、しかし文系のない大学では理系の学問も育たないことを政府は知らないのか。そう思うと、猛然と腹が立った。

当然のことながら、マスコミも、日本学術会議も、経団連もそろってこの通知を批判した。私も、日本学術会議の言語・文学委員会において、文科大臣通達は文系の学問は不要だと言っているに等しく、売られた喧嘩は買わなければならない、と強く主張するとともに、7月31日に開かれた日本学術会議緊急討論集会「人文・社会科学と大学のゆくえ」に出席した。立見も出るほど多くの人たちが危機感を抱いて集まってきていた。そのうち、私が特に感銘を受けたのは理系の人たちの発言だった。

天文学の専門家は、理系が役に立ち、文系が役に立たないなどという文科省見解は真っ赤な嘘である。自分は太陽系の外側にある惑星の研究をしているが、このほうが文系の学問よりもはるかに

役に立たない、と発言して場内を沸かせた。また建築学の専門家は、自分たちが建物を建てるときには、その町の歴史や文化を知らなければならない、文系を欠いた建築学などありえないと言って、文科大臣通知に対する強い批判を隠さなかった。

理系と文系の学問が相補的になっていなければ、大学は「総合大学」と呼ばれるに値しない。今回の通知は文科省の大学に関する無知をさらけ出しており、実際、諸方面からの強い批判を受けて、後に下村文科大臣も通知内容を事実上撤回せざるをえなくなった。

だが、今回の通知文のうち、「細分化された知を俯瞰し総合的な観点から捉える〈総合性〉、異分野の研究者等との連携・協働によって新たな学問領域を生み出す〈融合性〉」を訴えたくだりは評価に値する。「あまりタコツボ的な研究になるな」と説かれた「総合性」も、「文理融合」の必要性を唱えた「融合性」も、これからの学問のあり方を考えるとき、きわめて重要な問題提起であろう。

「総合性」と「文理融合」の2つはじつは人環の理念をなしている。旧教養部の改組によって人環は平成3年に誕生したが、改組に積極的に取り組んでおられた当時の西島安則総長は、旧教養部を「学術総合研究科」とすることにご熱心だった。文部省の提言によって「人間・環境学研究科」という呼称になってしまった後でも、人環では学術の「総合性」と「文理融合」を追求してほしい、と西島先生は強く願っておられた。専門知を追求するものである学問がある程度「タコツボ」的になるのはやむをえないが、しかし学問は最終的には「総合」を目指さなければならないと、個人的にも親しい関係にあった私に西島先生は熱く語っておられた。日本の諸大学のなかでも、特に京大には学術の「総合性」を目指す素地があり、それを今

日実現してくれるのは人環ではないか、というのである。

かつてのヨーロッパの大学には「総合性」も「文理融合」もあった。11～13世紀に創設されて以来、19世紀にいたるまで、ヨーロッパの大学には法学部、医学部、神学部、哲学部の4学部しかなかった。そのうち哲学部は20世紀の日本の教養部のようなところで、どの学部の人たちもまずは哲学部で「教養」を身につけなければならなかった。他学部に行かず、哲学部に残りつづけた人たちは、今日の哲学や理学を学んだ。要するに哲学部はもともと文理融合の学部だったのである。

生前、西島先生は、ボローニア大学の創立900年記念式典に総長として参加され、そのウィットに富んだスピーチで満場の賛辞を浴びられた。ヨーロッパの大学を熟知されておられた先生は、かつてのヨーロッパの哲学部のような総合的な学知を求められ、それを人環に期待されたにちがいない。

西島先生の期待通り、総人と人環は「総合性」と「文理融合」を旨とする学部・研究科として出発した。器はすでにできている。後は中身を詰めることであろう。それには文系と理系が共同でできるテーマをまず見つけなければならない。その見本を2つほど挙げておきたい。

人環には客員講座として奈良文化財研究所（奈文研）と京都国立博物館（京博）が参加している。人環が「総合性」「文理融合」を目指す上で特に参考になるのは奈文研である。奈文研の主要な仕事は古都奈良の文化財の研究、つまり文系の仕事である。しかしそこでは理系のスタッフが多数働いている。たとえば農学部ご出身の光谷拓実先生は、現存する法隆寺は670年の火災以降に再建されたという定説を覆し、五重塔の心柱が伐採されたのは594年であることを、科学的データをもとに立証された。1941年から1952年にかけて法隆寺五重塔が解体修理されたとき、寺外に運び出された古材が京都大学に残されており、光谷先生はその年輪年代を測定して、594年と確定されたのだった。これは日本の学校の歴史の教科書を塗り替えるような大発見で、マスコミでも大きく取り上げられた。

もうひとつは「生命」というテーマに関する生物学と哲学の共同研究である。一般に自然科学は

「よく分からないものは追求しない」という原則を有している。「よく分からないもの」の代表をなすのが「生命」である。生物学者は「生命は何か」などと問いはしない。発生論も生物学の大きな難関となっている。18世紀には前成説と後成説の論争が繰り広げられた。親のなかにすでにある情報をもとにして子や孫が生まれてくるという前成説は因果関係が明確で、「科学的」にも理解しやすい。それに対して後成説はいわば「無」から「有」が生じてくると主張しているようなもので、一部の自然科学者はこれを「非科学的」と断じた。18世紀も終わりに近づくと、後成説のほう有力になってきた。これは、後成説を裏づけてくれるようなデータが次々に発見されたということもあるが、当時の生物学者の多くが哲学者でもあったことによるところが大きい。哲学者は「分からないもの」をこそ追求しようとするものだからだ。

私見では、「分からないものは追求しない」というのは自然科学者の第一ステージにすぎない。第一ステージを終えたら、自然科学者には「分からないものを追求している」哲学者の言葉にも少しは耳を貸してほしい。F・ジャコブ（1965年ノーベル生理学医学賞受賞）の『生命の論理』や、I・ブリゴジン（1977年ノーベル化学賞受賞）の『混沌からの秩序』などは、超一流の自然科学者によって書かれた高度の哲学書である。そしてわれわれの人環が最終的に目指すべきものは、まさしくそうした高度の「総合性」と「文理融合」ではなかろうか。

（たかはし よしと）

慶應義塾大学博士（文学）。専門はゲーテ自然科学、グノーシス、ヨーロッパ精神史。慶應義塾大学文学部助手、京都大学教養部助教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授、立命館大学客員教授を経て、平成21年4月より現職および京都大学名誉教授。著訳書に『形態と象徴——ゲーテと「緑の自然科学」』（岩波書店）、『ドイツ人のこころ』（岩波新書）、『魔女とヨーロッパ』（岩波書店）、『ゲーテ・色彩論』（共訳、工作舎）、『グノーシス 異端と近代』（共著、岩波書店）、『グリム童話の世界』（岩波新書）、『10代のための古典名句名言』（共著、岩波ジュニア新書）など。

特集 外から見た総人・人環

身を置いて19年 離れて6年

堀 智孝 (京都大学白眉センター)



極端な二元論を持ち出して、時々手厳しい非難を受けることがあります。しかし、その逆もあって、出口の見えない堂々巡りの議論に二元論で整理がつくと、目の霧が

すっかり晴れた思いになります。デカルトの物心二元論ほど物々しいのを持ち出すまでもなく、二元論は使い方を誤らなければ日常的な小道具として便利です。

今から6年前の停年退職の折り、本冊子編集部から、同僚教員と学生院生諸氏に宛てた離任の挨拶を求められました。35年におよぶ教養部～人間・環境学研究科～総合人間学部時代を顧みて謝辞を述べ、そのあとに文字通りの蛇足を添えたのです。“…つまらない仲良しよりは、上等の敵が周りにいることが大事だと思った”とのひとこと、これで19年間の「総人」「人環」を締めくくったつもりでした。ところが、この記事が公開されてまもなく、日頃の親しい仲間から批難とも怨念ともつかない質問が飛んできて“仲間を仲良しと敵に二分してきたのか! ”、“長らく付き合ってきた僕はつまらない方か、上等の方か!!”との詰め寄りです。もちろん、これは当方の真意を知った上での意地悪ですが、やはりその背後には安易な二元論への批判があります。二元論は循環論からの脱出を可能にするので理系に好まれることは

あっても、文系には嫌悪感を持つ人が多い。このことは知っていましたが理系にも二元論を嫌う人は居られたのです。研究室でのある日、化学元素リンの地球循環で談笑して「植物は地球からリン酸を吸収し、太陽エネルギーで有機物を合成するのに対して、動物は有機物（食糧）を分解して活動のエネルギーを獲得し、そのときリン酸（肥料）を放出して地球に戻す。この釣り合い、すなわち植物と動物が互いに相手を不可欠なものとして共存する、これが生物界だ」というものです。このとき口が滑って、「キノコは八百屋で売られていても、あれは動物である。なぜなら、有機物を分解してエネルギーを獲得するからだ」と。この二元論はすべての生き物を丸ごと単純に動物と植物に二分したものですから、生物学の先生からこっぴどく叱られるのは当然でした。「生物界が動物と植物だけで成り立つなんてけしからん！それらの間を実に多くの生き物が繋いでいるのであって、とりわけ菌類を安易に動物に分類するとはどういうことか！」というお叱りです。上等の敵だと日頃から敬ってはいましたが、理系という膝元から二元論への厳しい非難が出たことにたじろぎました（相良直彦先生、その節には失礼しました）。

今から7年前の在籍最後の年、留学生のひとりに事故があって、そのうえ彼の実家が地球規模で遠かったため、職場の同僚（富田恭彦教授）から般若心経のコピーを貰い受け、俄仕立ての僧侶を務めました。その後も菩提を弔いたいと、毎朝出

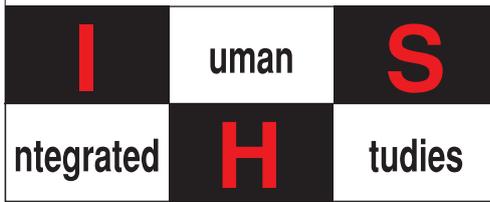
勤前に木魚でテンポを整えながら経を唱えていましたら、暗記してしまったのです。今年69歳、ひにひに記憶力が衰えるのに暗記力が維持されているのは不思議です。暗記を頼りの読経中にふとその日の会議や友人の顔が頭をよぎる、いわゆる邪念が入りますと暗誦が途切れて、最初に戻らないと経の続きが出てこないのです。脳で何が起こるのか、不思議な現象です。分析、解析、論理の捏合せなどへの興味が左脳を働かせて35年の理系教員の務めを支えました。他方、私の右脳には限りがあって、文学や芸術と言った創造性や総合性を要するものに力なく、この不足分は尊敬の念をもって文系教員諸氏の力を借りて補いました。自分ひとりで頑張っただけで文理両系をこなさなくて良かったと思います。この両系が一体不可分となって密に繋がっているという人環総人の良さを実感しました。教授会での激しい議論や討論の様子を漏れ聞いた他部局の仲間から時折「ならず者の集まり」との誹りは受けますが、上等の敵が集まったと言う意味では、下等な味方に囲まれなかったことを嬉しく思っています。

翻って、学生（総人）と院生（人環）諸氏には、“社会的に自立すること”、“思想的に独立すること”、もって、“周りの尊敬と信頼にたえうる人格を形成すること”を目指して精進せよと説いてきました。多分に抹香臭いものですが、彼らが“大学とはなにか”、“総合人間学それに人間・環境学とは何か”などと、簡単に答えの出しようのないものをしつこく問うて来るときにはいつもこの言で打ち返しました。尤も彼らも悪知恵を働かせて、この説教が始まると“堀教ですね”と冷ややかな笑みを作って上手に身をかわしました（当時院生の玉田知子さん、だらだら説教を短く止めて下さり有り難うございました）。さすがにならず者が育てた次世代のならず者達です。日々の生存競争に汲汲とするのではなく、昨日の自分と競争して新

しい自分を見つけようとする心意気、併せて、解らんことは他人の答えを当てにしないというふてぶてしさが身についています。「総人」「人環」を離れたいま、ここにこそ人間性と創造性の原点があると思っています。吉田南（旧称 二本松）キャンパスに身を置いている学生院生教員職員のみなさん、古来“名馬は驛馬より生ず”と申しますよねえ。

（ほり としたか）

京都大学白眉センタープログラムマネージャー（特任教授）。京都大学名誉教授。京都大学博士（理学）。専門は水圏の化学。京都大学理学部助手、教養部助教授、人間・環境学研究科助教授を経て、1993（平成5）年より大学院人間・環境学研究科教授。2010（平成22）年同研究科停年退職。2012（平成23）年4月より現職。



編集後記

◆『総合人間学部広報』第56号をお届けいたします。
今号は、ご退任を迎えられる10人の先生方からのメッセージ、および高橋義人・堀智孝両先生による「外から見た総人・人環」を掲載しました。今春で総人・人環を去ら

れる先生方それぞれの個性あふれる筆致に、この知的空間の幅広さを今更ながら実感させられるとともに、名誉教授の両先生お二人ともが期せずして、文理の融合・一体性ということをひとつの焦点として書いておられることが強く印象に残りました。先輩諸先生方それぞれのお言葉に鼓舞された思いです。
(Y・J)



人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会